

Title	高齢者の咀嚼能率と口腔関連QOLとの関係
Author(s)	栞山, 智博
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49260
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	はげ やま とも ひろ 栢 山 智 博
博士の専攻分野の名称	博 士 (歯 学)
学位記番号	第 2 1 9 2 3 号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 歯学研究科統合機能口腔科学専攻
学位論文名	高齢者の咀嚼能率と口腔関連 QOL との関係
論文審査委員	(主査) 教 授 前田 芳信 (副査) 教 授 天野 敦雄 准教授 舘村 卓 講 師 田中 宗雄

論 文 内 容 の 要 旨

【研究目的】

近年、医療の対象は、急性疾患が減少し、慢性疾患が大きな比重を占めるようになってきた。治療の目標についても、治癒や延命よりも、患者の QOL の向上とされるようになってきた。口腔関連 QOL を向上するためには低下した機能の回復を図ることが必要であり、その中でも咀嚼機能の回復は最も重要であると考えられる。しかし、咀嚼能力の客観評価と口腔関連 QOL との関係についてはこれまで検討がなされていない。

本研究においては、60 歳以上の高齢者を対象に、咀嚼能力と口腔関連 QOL の関係を明らかにすることを目的として、咀嚼能率と口腔関連 QOL の指標である Oral Health Impact Profile (OHIP)-14 スコアとの関係について検討を行った。

【実験方法ならびに実験結果】

実験 1. 日本語版 OHIP-14 の翻訳と妥当性・信頼性の検討

対象者は、大阪府老人大学講座受講者 297 名（男性 145 名、女性 152 名、平均年齢 66.4 歳）とした。信頼性の指標の 1 つである級内相関係数に関する対象者は、その中の 32 名（男性 12 名、女性 20 名、平均年齢 64.0 歳）とした。

まず原本である英語版 OHIP-14 を、forward-backward 法を用いて日本語への翻訳を行った。次に、自己記入式の質問票で、歯科治療の必要性、口腔の健康状態の自己評価などと OHIP-14 について回答させた。歯科検診では残存歯数を記録した。OHIP-14 は 14 項目から構成されている。その回答選択肢は 5 項目で、これらの点数を合計したものを OHIP-14 スコアとした。

検定の結果、信頼性に関して内的整合性を示す Cronbach の α 係数は 0.95、測定-再測定間の一致度を示す級内相関係数は 0.77 であった。また、妥当性に関しては OHIP-14 と口腔の健康状態の自己評価との間に有意な相関 (Spearman の順位相関係数 = 0.51、 $P < 0.01$) が認められた。さらに Mann-Whitney の U 検定ならびに Kruskal-Wallis 検定より、OHIP-14 スコアと全身の健康状態の自己評価、残存歯数ならびに歯科治療の必要性との間に有意な関連が認められた ($P < 0.05$)。

実験 2. 高齢者の咀嚼能率と口腔関連 QOL との関係

対象者は、大阪府老人大学講座受講者 588 名（男性 333 名、女性 255 名、平均年齢 66.2 歳）とした。調査項目は、質問票を用いた調査、歯科検診、口腔機能検査とした。質問内容は、年齢、性別、全身の健康状態の自己評価、経済

状態の満足度、食事時の口腔乾燥感ならびに OHIP-14 とした。歯科検診では、Eichner 分類による咬合支持を記録した。口腔機能検査は、検査用グミゼリーを用いた咀嚼能率を測定した。統計学的検討には Mann-Whitney の U 検定と Kruskal-Wallis 検定、ロジスティック回帰分析を用いた。

対象者の OHIP-14 スコアの平均は 11.3、中央値は 11 であった。各群間の差の検定の結果、全身の健康状態の自己評価、経済状態の満足度、食事時の口腔乾燥感、Eichner 分類、咀嚼能率について OHIP-14 スコアに有意な差が認められた。さらに OHIP-14 スコアを目的変数としたロジスティック回帰分析を行った結果、経済状態の満足度、食事時の口腔乾燥感、Eichner 分類ならびに咀嚼能率が口腔関連 QOL に対して有意な説明変数となった。

実験 3. 義歯製作による咀嚼能率の改善が口腔関連 QOL に及ぼす影響について

対象者は、大阪大学歯学部附属病院咀嚼補綴科にて、新義歯を製作し咀嚼能率の改善が認められた者 12 名（男性 7 名、女性 5 名、47 歳～87 歳、平均年齢 72.8 歳）とし、義歯装着前後における OHIP-14 スコアの変化について Wilcoxon の符号付き順位検定を用いて比較検討した。その結果、新義歯の装着により咀嚼能率の改善が認められた者は、OHIP-14 スコアが有意に ($P=0.008$) 向上していることが示された。

【考察ならびに結論】

本研究における日本語版 OHIP-14 は、Cronbach の α 係数と級内相関係数がともに高く、十分な信頼性を示している。また、妥当性に関しても、OHIP-14 スコアと口腔の健康状態の自己評価、全身の健康状態の自己評価、残存歯数、歯科治療の必要性との間に有意な関連が認められ、これは過去の報告とも一致する結果となっている。したがって、日本語版 OHIP-14 は日本の高齢者に適用可能であると考えられる。

口腔関連 QOL を目的変数とした多変量解析の結果より、咀嚼能率が経済状態の満足度や、食事時の口腔乾燥感、咬合支持などの因子を調整した上でも有意な説明変数となった。さらに、Wilcoxon の符号付き順位検定の結果より、咀嚼能率を向上させることで、口腔関連 QOL が向上することが示された。

以上の結果より、高齢者の QOL の向上には、義歯による治療を中心として、咀嚼能率の維持・向上を図ることが重要であると考えられた。

論文審査の結果の要旨

本研究は、高齢者における咀嚼能力と口腔関連 QOL との関係を明らかにすることを目的として、世界で広く用いられている Oral Health Impact Profile-14 (OHIP-14) の日本語版を作成し、高齢者における咀嚼能力と口腔関連 QOL との関連をロジスティック回帰分析を用いて検討を行ったものである。

その結果、作成した日本語版 OHIP-14 は、妥当性ならびに信頼性を有することが示された。さらに、ロジスティック回帰分析の結果、咀嚼能力は高齢者の口腔関連 QOL と有意に独立して関連していることが示された。

本研究において、高齢者に対し、義歯による治療を中心として咀嚼能力の向上を図ることで、口腔関連 QOL が向上することが示されたことから、博士（歯学）の学位取得に値するものと認める。